

# 「在米日系人／在外日本人であること」の現代的意味 エスニシティの現代社会論に向けて

南川文里

## はじめに

海外、とりわけ北米に在住する「ジャパニーズ」と呼ばれる人々について、二つの主要なテーマが存在している。それは、(1) 主に第二次世界大戦以前に移住した人々とその子孫をめぐる諸現象、(2) 1950年代以後に北米に移動・移住した人々とその子孫をめぐる諸現象である。ここでは、便宜的に、前者については、その多くが既に移住先の地域に定着し、現地の国籍を取得していることから「在米日系人」と呼び、後者については、その多くが海外駐在員や留学生などの長期滞在者であり、日本との実質的なつながりを保持していることが多いことから「在外日本人」と呼ぶ。もちろん、このようなカテゴリー化は、多くの例外事項を含んでいるため、過度に一般化することは危険である。本稿は、このような「名付け」によって、「ジャパニーズ」としての多様なあり方を強引に定式化するものではなく、それぞれの事例の検討から、国際移動やエスニシティの現代性をめぐる問題構成を喚起するものである。

## 1. 日系トランサンショナリズムとエスニシティ

第二次世界大戦以前に主に北米に移住した人々の子孫である日系人のあいだでは、「日系であること」の自明性は揺らいでいる。たとえば、2000年アメリカ合衆国センサスにおいて、自分が「日系人」であると回答した人口は、約115万人であったが、そのうち約30%が、日系であると同時に「他の人種およびアジア系グループ」にも属する、すなわち「混血」であると回答している(U.S.Bureau of Census, 2002: 9 10)。積極的に「混血」であると名乗った30%以外にも、実際には複数の出自を持つ人は少なくない。このように、在米日系人にとって、エスニックな出自は複数化している。そのため、現代の日系人にとってのエスニシティとは、複数の起源のなかから、「日系であること」を選択した結果であると見なされている<sup>1)</sup>。すなわち、現代の在米日系人にとって、日系としての意識は、両親が日系人であるという血統だけで確定するものというよりは、エスニックな自己の積極的な選択を伴うものである。

現代の日系エスニシティの特質を考える際に重要なのは、エスニシティの機能的な変化である。エスニック経済内部の職に依存せざるをえなかった戦前期の日系一世や二世にとって、「日系であること」とは、アメリカで生存するための生活資源へのアクセスを可能にする具体的な人的ネットワークを指していた。しかし、戦後になると、日系人のあいだでは、職業選択、婚姻、友人関係などの面で「日系」にこだわらない人的結びつきが定着するようになった。そのため、実質的な連帯という機能が減退するにつれ、逆説的なことであるが、「日系であること」

が示す意味内容がいっそう重要になってきた。それゆえ、現代の日系人のエスニシティをめぐる争点は、日系であることを表象するシンボル、記憶、歴史にある。そして、日系人にとってのエスニシティも、他のエスニック集団と同様に、生存のための連帯の基盤から、アイデンティティとして選択されるものへと変容しつつある（Waters, 1990）。

近年、北米だけでなく、中南米も含めた各国の日系人のあいだで、国際的あるいはトランサンショナルな連帯を確認しようとする動きが活発になっている。M・クレイトンは、各国の日系人が会合を重ねるなかで、戦時強制収容に対し、トランサンショナルな枠組で補償運動が生まれ、日系人という共通の起源にもとづいた、国境を越えた連帯が生まれようとしていることを指摘している（クレイトン論文を参照）。このように、トランサンショナリズムは、ナショナルな補償の枠組ではとらえられない問題へとコミットする社会運動としての潜在力を有している。また、各国における日系人の歴史を、日本を出自として各地に離散した「日系 Nikkei」という視点から再構成する試みも行われている（Hirabayashi et al., 2002）。

その一方で、トランサンショナルなネットワーキングは、各国における日系エスニック文化の相違を認識させる機会をつくりだしている。クレイトンによれば、各国の日系人が集まる会合では、ホストとなった国グループが、その国の独自の文化、およびその国のかなで生まれた独自の日系文化を積極的に紹介するという。このような会合に参加する人々にとって、エスニシティは、それぞれが現在生活している国の「国民意識」のもとで成立していることが多い。すなわち、日系人は、これらの会合を通して、共通のエスニックな起源を持ちながらも、生まれ育った社会や文化の相違を再確認しているのである。

このような状況は、エスニシティの選択的側面の強化とも関わっている。少なくとも、北米の日系人にとって、トランサンショナルな結びつきは生存のうえで絶対に依存せざるをえないような社会的資本ではない。むしろ、共通の出自としての「日系」を強調しながら、各国で生まれた独自のエスニック文化を積極的に確認するという動きは、エスニシティを、個々人のアイデンティティを特徴づけるシンボルとして考える思考枠組にもとづいている。そして、シンボリックなオプションとしてのエスニシティは、ホスト社会への構造的な同化（職業や人間関係におけるエスニックな隔離の解消）を背景に登場したものである（Waters, 1990）。この点を考慮すれば、少なくとも北米の日系人におけるトランサンショナリズムが、それぞれのホスト社会への構造的同化にもとづいていると仮説づけることも可能である。

とはいえ、日系人のトランサンショナリズムをめぐる状況も日々変化している。とくに、国際的な人の移動の活発化の影響は大きい。とりわけ1990年入国管理法の改正以後、多くのラテンアメリカ出身の日系人が、日本で就労、生活するようになった。また、北米の日系人のなかでも、留学・仕事・旅行を通して、日本に一時滞在、長期滞在する人々は決して少なくない。すなわち、トランサンショナルなネットワーキングによって、ルーツとしての「日本」がヴァーチャルに構築される一方で、実際の滞在を通して、アクチュアルに日本を体験する人々も増えている。現代という同時代においては、「日系であること」の意味は、（日系アメリカ人、日系カナダ人などとして）各国の文脈において生じる文化変容、トランサンショナルな「ホームランド」として構築されるヴァーチャルな「日本」、そして、実際に生活し体験した「日本社会」など、次々と増殖し、複数化している。日系トランサンショナリズムの意義も、このように複

数化し、重層する「日本」という同時代現象との結びつきで考察されるべきだろう。

## 2. 在外日本人におけるホームランドの再解釈

日系移民の子孫が「日系」としての共通の起源を意識する一方で、北米地域では、多くの「日本人」が、短期／長期にわたって生活している。このような在外日本人のなかから、家族とともにホスト社会に定着し、永住・帰化する人々も現れている。アメリカでは、日本からの新しい移民は「新一世」と呼ばれ、戦前に移住した人々の子孫である日系アメリカ人とは異なる、独自の下位文化を持つグループと考えられている。さらに、新一世に加えて、日本企業の現地駐在員とその家族、留学生、ワーキングホリデー（カナダの場合）による滞在者から非合法滞在者まで、さまざまな長期滞在者が生活している。これらの長期滞在者の多くは、法的には永住を前提としない「非移民」であり、実際に帰国するものが多いが、一部は永住を選択して「新一世」となっている。このような日本人長期滞在者にとって、「日本人であること」はどのような意味を持っているのであろうか。

名越万里子によるカナダの日本人長期滞在者への調査によると、日本人のカナダへの国際移動を促した動機は、経済的なものではなく、むしろ社会的なものであったという（名越論文を参照）。名越のインタビューで移住の動機として挙げられたのは、カナダにおける物理的環境、精神的な豊かさ、人々の干渉や世間体の拘束からの脱出、教育システムの相違、年齢・性別による制約からの脱出などであった。これらは、日本人の国際移動が、経済的格差を前提としたプッシュ＝プル要因によるものではないことを示唆している。また、現代の移民研究では、親族や同郷の友人が作る社会的ネットワークが、移住を誘発することが強調されている。しかし、筆者が行ったロスアンジェルスの日本人長期滞在者を対象とした調査では、多くの日本人が、人的ネットワークを介することなく、旅行代理店や留学斡旋業者などのツーリズム産業を媒介にして移動していた。北米への日本人の国際移動を、典型的な移民研究の枠組で説明するのは難しい。

また、在外日本人にとって「日本人であること」は、拭い去ることができない桎梏として現れる。名越の調査では、日本人長期滞在者の多くが、日本社会を否定的な言葉で、カナダ社会について肯定的なイメージで語っている。このような「日本」観は、回答者の実体験にもとづくものもあるだろうが、むしろカナダで生活する 現在 を正当化するべく、否定的に構築されたものと考えるべきだろう。これは、回答者たちにとって「日本人であること」が自明であるにもかかわらず（であるがゆえに）、海外生活において、その意味づけを迫られるために生じる。在外日本人のあいだでは、しばしば、「日本」について、肯定的な意見を持つか、否定的な意見を持つか、両極端に分かれる傾向があるといわれる。このような「日本」をめぐる過剰な意識化は、海外生活のなかで自らの出自について反省的に考察する機会が増えた結果、拭い去れない自らのエスニシティ／ナショナリティとして（再）構築されたものであると考えられる。

在外日本人が構築する「日本」像もまた、多様である。名越の調査にあるように、日本を、否定的なイメージ、脱出するべき対象として語る傾向は、女性に顕著である。K・ケルスキーは、女性の多くが、留学や海外生活を「脱出」や「抵抗」といった言葉で語り、否定的な「日

本」に対置させるかたちで、「新しい自己new self」を構築する傾向があると指摘する（Kelsky, 2000）。また、海外生活者の子どもの教育においては、「日本」は、しばしば保持・獲得されるべきものとして位置づけられる。町村敬志によれば、海外駐在員の子どもが多く通うロスアンゼルス郊外の日本語補習校では、帰国後の適応のために「日本的な習慣や態度」を身につけることも含めた教育が行われる。しかし、同時に、現地化した新一世の子どもを対象とした日本語学校では、現地文化とハイブリッド化した「日本」が構築されつつあるという（町村, 1999）。このように、日本をめぐるイメージは、移住の性格やジェンダーなどに応じた多様なかたちが、重なり合いながら成立している。

以上のように、在外日本人にとって「日本人であること」は、国籍としての自明性を伴いつつも、さまざまなかたちで再解釈される。その再解釈の過程で、「日本人であること」は、階層、ジェンダー、移住の形態など、それぞれの文脈に応じて、否認、肯定、真正化、（他の要素との）融合などの作用を伴う。そして、このような「日本人であること」の（再）構築は、在外日本人の移住を生み出す動機のなかでも非常に重要な位置を占めているのである。

### 3. 日系エスニシティと個人化

本稿では、二つのカテゴリーにおける「ジャパニーズであること」の再構築過程を考察したが、実際には、この二つの現象は同時代的文脈を共有している。それゆえ、その現代的意味を考察するためには、二つを横断する現代社会の特質に注目する必要がある。

現代社会の独自性をあらわすキーワードとして、「個人化 individualization」を挙げることができる（たとえば、Beck and Beck-Gernsheim, 2002）。個人化という語は、個々人のライフコースが、国家、家族、階級、教会、企業、学校などの地位や制度によって規定される程度が低下し、個人の「選択」や「責任」がいっそう重視される社会状況を指す。個人化は、さまざまな制度や中間集団に対する一体化を解体させるとともに、流動的な社会における不安定さのリスクを個人（の内面）へと収束させる価値体系を生み出している。その反面、社会の流動性が上昇するなかで、ナショナリズムや道徳などの共同体的なものと同一化することへの欲求が高まるという側面もある。そして、このような個人化という視点は、日系エスニシティの現代的状況の理解に、新しい洞察をもたらす。

たとえば、在外日本人の多くが、人的ネットワークに依存することなく、国境を越えて移動する。「社員」として移動する企業駐在員を除けば、移動者の多くは、特定の村落や親族などの共同体の一員としてではなく、共同体から切り離された「個人」として移動する。日本人移動者の移住経路を支えているものは、人的つながりではなく、旅行産業、留学産業、各種のメディアなどであり、その多くは商業化されている。言い換えれば、多くの日本人移動者は、「商品」としての国際移動を「消費者」として購入している。いまや、個人化された移住経路は、高度に商品化されている。

個人化は、移動の様式を変化させただけではない。先述したように、経済的な利害関係以上に、移住やエスニックな行為に意味を付与する過程そのものを重視するようになる。すなわち、ここで重要なのは、経済的利害よりも、自己肯定感や満足感のような心理的な要因なのである。

Z・バウマンによれば、現代社会（バウマンは「消費社会 consumer society」と表現）における仕事は、「審美的な価値基準 aesthetic criteria」によって選択されるという。審美的な価値基準のもとでは、仕事は、「意味がある」「経験」「芸術的」といった言葉で語られ、個々の仕事や経験が「おもしろい／退屈」の二分法によって把握されるようになっている（Bauman, 1998）。このような審美的な価値基準は、労働だけに限らず、個々人の生活を反省的に評価するための目安になっている。また、これは、客観的基準に依拠しない主観的な要素が大きいため、階級や階層を越えて共有されている。審美的な価値観の挿入は、既存の産業社会的な「幸福」観の問い合わせを要求するとともに、客観的基準を失い、絶え間ない自己準拠的な反省実践を繰り返すことを個人に迫ることになる。そして、実際には、自らを審美的に評価できるごく一部の人々（グローバル資本主義の利益を独占するニューリッチと重なる）と、大多数の「新しい貧困層 new poor」への分化を生み出す。

筆者は、2002年にロスアンジェルスで非合法に就労する日本人若者層を対象に調査を行ったが、その際、多くの若者が、自分の越境生活を、経済的な利害ではなく、「自分のやりたいことをやる」という審美的な主観的語りによって評価していた。そして、海外において非合法就労している現状を、「やりたいことをやっている」という言葉で肯定的にとらえようとする傾向があった（南川, 2002）。また、名越の調査でも、経済的要因ではなく主観的な基準によって、移住の動機やカナダでの移住生活を評価する傾向がある。多くの国際移民研究は、移民として、自らの利益が最大になるように行動する合理的な行為者を想定してきたため、消費社会における行為の動機づけや評価基準の変化（誤解を恐れずに言えば、アイデンティティをめぐる問題）を十分に考慮してこなかった。ロスアンジェルスやバンクーバーの日本人滞在者の事例は、経済的・政治的な動機ではなく、「やりたいことをやる」という審美的な語りを伴って、移住すること自体が自己目的化する傾向があることを示している。

また、このような移住の動機づけや評価において、「日本人」であることの意味の（再）構築も重要な問題となる。移住者は、しばしば、客観的基準がないまま自分自身の選択を反省するなかで、「日本の脱出」や「海外ではじめて日本人であることについて考えた」など、日本人としてのアイデンティティを（肯定的にも否定的にも）本質化・真正化し、自己評価の中心軸とする。現代の日本人の国際移動において、自分自身の確かさの感覚を得る（そして、わたしの重要な構成要素として「日本人」であることを確認する）という動機や評価基準は、非常に重要なものになっている。このような、消費者社会におけるアイデンティティをめぐる問題は、今後の国際移民研究においても重要なものになるだろう。

現代社会における審美的な基準やアイデンティティ問題の重要性は、在米日系人における日系トランサンショナリズムの拡大という事例でも確認できる。近年の集合行為論は、行為に内在するアイデンティティ生成の過程を重視しているが（Melucci, 1996），日系トランサンショナリズムも、「日系」としてのルーツに関する記憶を共有し、アイデンティティを確認するための実践が核となっている。そして、日系人としてのトランサンショナリズムは、それぞれの国民意識も含めた、他の帰属意識に対して排他的なものではなく、さまざまなレベルで重層する帰属の一つに過ぎない。個人化状況におけるエスニシティとは、一つの帰属意識が他を凌駕したり、強引にまとめあげたりするものにはなりにくい。それは、現代の政治経済構造のなかで構

築され、何重にも連なる「わたし」を構成する要素の一つである。多民族社会であることを自認する南北アメリカの国民社会では、エスニックな起源もまた、個人の実存を豊かにするものと考えられている。日系トランサンショナリズムは、そのような関心の共有のなかで生まれた、すぐれて現代的な現象である<sup>2)</sup>。

とはいって、エスニシティや移動の個人化が、経済的利害の問題からの解放を指しているわけではない。歴史的には、日系人のエスニックな連帯の形成は、経済的利害関係の共有をもとに生まれたものであった（Bonacich and Modell, 1980）。しかし、エスニシティや国際移動過程そのものが個人化することによって、当事者たちは、自分の置かれている状況を主観的な言葉によって評価し、特定の利害関心を共有したり、連帯意識を抱いたりするのが困難になった。しかし、実際には、北米の日系／日本人社会は、その出自、教育経験、言語能力、社会的資本によって、日系アメリカ人、新一世・新二世、国際結婚による定住者、企業駐在員、大学生、語学学校生、非合法就労者、非合法滞在者といったカテゴリーで、緻密に階層化された構造になっている。多くの日系人／日本人が、きわめてパーソナルな、あるいは現代資本主義によって商品化されたネットワークに依存しながら、審美的基準によって自分の置かれた状況を理解しようとすることで、在外日系社会の階層構造が見えにくくなっている。たとえば、日本でフリーターとして生活し、アメリカで非合法に就労する日本人の若者は、移住先での不安定な生活環境も、「やりたいことをやっている」「冒険」などの審美的な基準によって肯定的に評価しようとする（南川, 2002）。それゆえ、主観的なレベルでは自分の生活に充実感を感じながらも、フレキシブルな労働市場における不安的な立場を追認している。日系人のトランサンショナリズムも、アイデンティティ構築のための実践として立ち上がりながらも、各国間の日系人の経済的な格差を是正するような方向には進みにくい。日系人／日本人におけるトランサンショナリズムの拡張と個人化が、既存の階層構造の維持、あるいはグローバリズムのもとでの新しい階層化の登場と、どのように関連しているのかという問い合わせべきだろう。

## おわりに

ここまで、在米日系人および在外日本人という二つの事例から、トランサンショナリ化する世界において「ジャパニーズであること」の意味を多角的に考えてきた。前者において顕著なのは、各ホスト社会への包摶を前提としながら、そのなかで政治的な資源として、あるいはアイデンティティの「確かさ」の感覚を構築する実践として、日系エスニシティの模索が行われていることである。一方、後者の場合、国境を越えて移動することの自己目的化と、そのなかでの「日本」イメージの肯定的／否定的再構築が生じつつある。この二つの事例は共に、現代社会における個人化と、そのなかにおけるエスニシティの役割の多様化という変化を反映している。現代の日系エスニシティについて考察するにあたって重要なのは、さまざまなエスニシティの発現のかたちを、個人化やホスト産業化などといった言葉で表現される、同時代的な社会条件の変化と結びつけることである（樋口, 1999も参照）。エスニシティ研究や国際移民研究の社会学的理論枠組は、産業社会／近代社会という条件を前提にして成立してきた。その点を批判的に再検討しながら、今後のエスニシティのあり方を考える態度が求められている。

## 注

- 1 ) 一世や二世の場合、排日運動や戦時強制収容の経験を通して、「日系であること」を強制的に認識させられたり、徹底的に否認させられたりした。これに対し、三世以降の場合、エスニックな自己定義は、相対的には自由な選択のもとにある（もちろん、完全に自由ではない）
- 2 ) 最近の移民史研究では、戦前期の移民一世をトランスナショナルな行為者と見る視点が定着しつつあるが、筆者は、現代の日系トランスナショナリズムの新しい特徴として、メディアの革新や移動性の向上に加え、各国ナショナリズムにおいて文化的多様性に対する寛容さが拡張していることも重要であると考える。

## 引用文献

- Bauman, Zygmunt, *Work, Consumerism, and the New Poor*, Buckingham: Open University Press, 1998.
- Beck, Ulrich, and Elizabeth Beck-Gernsheim, *Individualization*, London: Sage, 2002.
- Bonacich, Edna and John Modell, *Economic Basis of Ethnic Solidarity: Small Business in the Japanese American Community*, Berkeley: University of California Press, 1980.
- 樋口直人「個人戦略とエスニシティ」『一橋論叢』121:2:338-352. 1999.
- Hirabayashi, Lane Ryo, et al. eds., *New World, New Lives: Globalization and People of Japanese Descent in the Americas and from Latin America in Japan*, Stanford: Stanford University Press, 2002
- Kelsky, Karen, *Women on Verge: Japanese Women, Western Dreams*, Durham: Duke University Press, 2001.
- 町村敬志『越境者のロスアンジェルス』平凡社, 1999.
- Melucci, Alberto, 1996, *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 南川文里「現代の見えざる『移民』：ロスアンジェルス在住日本人若者層における『非合法就労』」日本社会学会第75回大会, 2002.
- U.S.Bureau of the Census, Department of Commerce, "The Asian Population", *Census 2000 Brief C2KBR/01 06*, Washington D.C.: Government Printing Office, 2002.
- Waters, Mary C., *Ethnic Options: Choosing Identities in America*, Berkeley: University of California Press, 1990.